平井金三氏の駁論に答ふ

龜田次郎

自分が去ぬる五月發行の本誌雜報欄に掲げた一文に對して、平井金三氏は先月の本誌に大駁論を草せられた。自分はこの駁論について、其の儘打棄て置かうかと思うたのであるが、少し辯じておかねばならぬ點もあるし、且又同氏の誤解の箇所もあるから、止むを得ず、爰に其答辯をすることにした。これは自分も誠に遺憾に思うのであるが、致方がない次第である。

平井氏は其駁論の初に於て、自分が書いた所感について、

「論者の奥意は知られど、唯漫然冷評をしたもので、眞面目に研究する態度でないらしく、殊に明に本名をも名乘らず、恰も犬の遠吠の樣で有るから、多忙の折態々答辯する迄も無しと其儘打棄置く積で居たが、再三人の勸むるに任せ一言申す事にしました」

といはれたが、自分はこの言に對して一言爰に辯じて置かねばならぬ。平井氏は單に自分が書いた文章の一二向丈を採り出して、彼是といはれるのであるが、これはお考違ひかと思ふ。自分は決して漫然冷評をしたのではない。學理上、自分は氏の所說が全然誤つて居ると信じたから所感を述べたのである。氏は自分を眞面目に研究する態度で無いらしいといはれたが、何を以てかく斷言せられるのであるか。自分は生來魯鈍の質であるが、師友諸氏の指導助力の下に言語の學を專攻する者である。又氏は「殊に明に本名をも名乘らず」と攻擊せられたが、これについて辯じて置く必要がある。當時語學協會から本會へ宛招待券が來て、誰か傍聽に行かねばならぬ筈であつたが、折惡しく講演當日（四月廿一日）は編輯打合例會があつて、編輯員は

何れも差閊るから出掛る事が出來ない。それで藤岡博士から自分に依頼され、傍聽に參つたのである。又元來本會ではその誌上の雜報(時評)欄には、本名をいはずに雅號を以て書く規約になつて居る。この事は單に本誌のみに限らず、我東都に於ける諸種の雜誌は大方同じ例である。自分もこの規約に基いて其本名をいはなかつたので、其の上自分は將來は知らず、現今に於ては一の雅號を有せぬ所からして、止むを得ず、姓名の頭字を採り、且編輯員でなく全く一局外者たる故を以て、(J.K.寄)として置いたのである。決して故意に本名を名乘らなかつたのでは無い。累を他人に及すのを患うるから、こゝに明かに申して置く。以上は平井氏に篤と御承知置を願ふ次第である。又氏の言はれる迄もなく、學術上の議論には冷評は避くべきもので、このことは自分も能く知つて居る。然るに氏の駁論を見ると、氏こそ却つてこの弊に陷られて居ると思ふ。氏は自分の論評に對して、「恰も犬の遠吠の樣で有るから」といはれて居るではないか。然し自分の所論については、犬の遠吠どころでなく、餘程反響があつたらしいと思はれる。今自分は順次氏の駁論に對し、一々學理上から反駁を加へよう。

氏は

「評論は右申す如く極て漠然たるものですが、中にこれと思はるゝ節は、不規則動詞の活用が「或他の動詞より分出し、變轉し、若くは混淆形のもので有る」と云ふ論者の說で、……然るに私は不規則動詞而已と言ふたのでは無い、吾規則動詞と言はるゝものも決して一定の變化をせず四種六變化が有ることを述べ、之を「曲げ」有る語と申したが、……語尾の「る、れ」などの事と思はるゝが、規則動詞の中にも「る、れ」を附けても變化するものも有り、又之を附けずして變化するものも有る、これ等は何とさるゝか……」

といはれて居る。自分はこれについて十分辯駁しようと思ふ。自分が過日聽いた際には、平井氏は時間不足の爲めに取急がれた故か、不規則動詞ばかりについて述べられたから、曩には只不規則動詞のみについていつたのであるが、今前掲の氏の言によると、不規則動詞ばかりでなく、規則動詞までも含まれて居るとの事である。これは尙更自分にとつては結構な事である。

我日本語は漆着語であつて、氏のいはれる如く曲折語ではないと信ずる。又我動詞は文語には規則、不規則合せて九種の活用があり、この各活用には各六種の變化があるこれが現今の口語では九州中國邊の一部を除いて、他の全國の大部分の土地では、五種の活用になつて居るのである。即ち

文語	口語
四段活	五段活
上一段活	上一段活
下一段活	下一段活

上二段活――――――上一段活
下二段活――――――下一段活
加行變格――――――加行變格（變形ナナセリ）
左行變格――――――左行變格（變形ナナセリ）
奈行變格――――――奈行五段活
良行變格――――――良行五段活

である。これらの文語、口語の諸種の動詞は、かく異つた活用形をして居るとはいへ、其活用の根元は皆一つで、四段活から出たのである。尤も自分の研究ではこの根元といふ四段活は、今日吾々のいつて居る四段活ではないので、今日所謂四段活は幾多の混亂變化を經た後に出來たものである。それであるから四段活といふのは、只四つの段階に活用するといふ意味である。然しこの四段活の事は別の問題に屬するから、今爰には單に今日の所謂四段活として便宜說明する。自分は動詞について數年前から研究して居るので已に一段落がついたから、近々その結果を何かの誌上に發表する積りである。それで詳細な論述はその折に讓つて置く。只爰には要領丈をいはう。

自分は日本の動詞活用形は、

一、母音變化（Vokalwechsel）

二、類推作用（Analogie）

三、漆着（Agglutination）

の三つの作用から成立つたものであると信ずる。この三つの作用か或は單獨に、或は相互結合して、其結果諸種の活用形が出來たものである。今一々諸種の活用形の成立つたことをいうのは、紙面を埋め過ぎる恐れがあるから、其は前にもいつた樣に他日の發表に讓り、爰には平井氏の駁論に答へる爲めに、氏の指摘せられた規則動詞中の下二段活、不規則動詞中の加行變格について其成立を述べ、他は凡て略することにした。

自分は前にもいつたやうに、我動詞の原形ともいふべきは四段活であつて、他の諸種の活用形はこの四段活から分出し、變轉し、又は其混淆形であるといふのであるが、然らば規則動詞中の下二段活が、この四段活から出たといふ證明は如何かといふに、

一、後世下二段に活用さすものを、上古では四段に活用させたものが多い。例へば、

隱る、觸る、忘る、馳す、寄す、隔つ、給ふ、祓ふ、含む、止む、恐る、避く、などの例が澤山ある。

今古書の中から、其用例を二三示さう。

古事記の歌　上卷　青山に日が迦久良婆

全　下卷　みやま賀久里
万葉集十五　やそしま我久里
万葉集五、　白雲のちへに邊多天留つくしの國は
万葉集二十　いそに布理
古事記下卷　こふこそはやすくはだ布禮
日本紀神代歌　わがぬれしいも和素遲珥

二、所相の「る、らる」は、後世下二段の活用であるけれども、萬葉時代には常に四段活である。其例は、

万葉集二十　ひとれろにいはる物から

三、敬相の「さ、さす」は後世下二段の活用であるけれども、萬葉時代には常に四段活である。この事は已に我動詞活用についての祖書である詞の八衢にも詳しく論じてあるから、一々爰にはいはぬ。詳しい事は同書上卷左行の條を見れば明かる。

四、助動詞の「す」(令)は後世では四段のものと下二段のものとに分れたが古くは四段ばかりに活用させた例が少くない。これも矢張詞の八衢に詳しくいつてあるから、それを見られよ。

五、四段言を用ゐて他動詞のいひ方に活用さすのには、其將然段に「す」を添へるので、即ち浮く、釣る、を浮かす、釣らす、といふ類である。此浮かすなどと同じ形の詞に遲らす、替はす、暮らす、懲ら燋す、がす、醒ます、浸たす、など猶この外にも澤山あるが、此等は皆あ韻の次に「す」を添へたもので、遲る、替ふ、暮る、懲る、燋く、醒む、浸つ、などの語を一旦四段に活かせて、其將然段に「す」を添へた形である。然るにこれらは今は皆四段言ではなく、上下二段言となつて居る。

六、勢相をあらはすのには四段言では、其將然段に「る」を添へるのであるが、今「笑む」といふ動詞は其勢相では「笑まる」となるのである。處が「定む」といふ動詞は、他動詞であるが、これを自動詞とするには「笑む」が「笑まる」となると同じ法で「定まる」となるのである。然し「定む」は決して現今の四段言ではない。

以上五、六、の例證を見ると、他動詞、勢相となる場合にのみ四段活にした俤を殘して、今は全く二段言となつて居るけれども、其始は四段言であつたと思はれるのである。

七、四段と下二段との活用形を比較して見ると、下二段活の將然、連用、二段は四段活の命令段と其形を同じうして居る上に、下二段活の命令段は、其將然段と同じ形であつて、四段活の命令段と同韻である。且下二段活では後世では其命令段に「よ」を添へるが、上古では「よ」を添へずして用ゐて居つたのである。即ち

古事記　かりごものみだれば美陀禮
輕太子の歌
万葉集二、　みいくさをめしたまひつゝちはやぶるひとをやはせとまつろはぬと治跡（チサメト）
人麿の歌

の如くに用ゐてある。これは丁度四段言の命令段と同じ用例になつて居る。

以上擧げた七ヶ條から見ても、下二段活は四段活から出來た形であることが明かるのである。尙この外種々の證據もあるが、さまではと思うて、主なるもの丈いつておくのである。

次に氏は前にも引用して置いたやうに、我動詞の活用形に存する「る、れ」についても其何なるかを問はれ、これは漆着的變化なるか。もし然りとせば其所を說明せよと云はれた。如何にも自分はこの「る、れ」は漆着的のもので、前掲の我動詞活用成立の第三の作用はこの點であるといふので、今その說明をせう。

我動詞の規則、不規則の何れを論ぜず、この「る、れ」のついて居るものは、皆「有る」の漆着からかく變化したものである。これは今更自分が事新しくいふまでもなく、已に我語學者に唱へられた說で、近くは平井氏の御同僚、金澤博士も屢諸種の論文の上に述べられて居る。この「る、れ」が「有る」の漆着したものであることは、前にいつた下二段活の動詞について其例をいふと、其連躰段で「ウレフル心」「ヲサムル國」などゝいへば、「憂ヒッヽアル心」「治メッヽアル國」の義で悉く「アル」の意を含んで居るのでも直ち

に知れるのである。又上一段活の動詞に「らむ」、「べし」などの助動詞が連續する場合に於て、他の動詞の例によれば終止段について、

似るらむ
見るらむ
似るべし
見るべし

といふべきものであるのをこの上一段活のものに限り連用段について、

似らむ
見らむ
似べし
見べし

となつて「る」のないものとなる。これらは亦以て「る、れ」の漆着した證ではないか。この外所相の「らる」なども、皆この「有」の漆着から出來るのである。この「有る」が母音變化をして「得」となり、下二段の活用となり、この「有、得」の二つが一は自動詞、一は他動詞となる作用をするのである。序にいつて置くが「有る」は今日では良行變格となつて活用して居るが、元は四段活であつて、それが變轉して成立つたものである。これて漆着的變化の事は明かつたであらうと思ふ。

次に不規則動詞の加行變格は如何かといふに、これも他の動詞から分出し變轉したものである。今說明上便宜の爲め圖で示さう。

こ　き　く　くる　くれ　こよ――――加行變格
こ　き　く　くる　くれ　きよ――――加行上二段活

この圖に示す如く、加行變格と加行上二段活とを比較して見ると、其活用形は兩者大同小異であつて、只將然段と命令段とが異つて居る丈である。然し命令段は兩者共に其將然段に「よ」を添へて用ゐるのであるから、結局將然段丈の違ひである。それで自分は加行變格の活用形の成立は、根元活用形である四段活から出來た、上二段活（この事に關しては論があれど別問題なれば今は略した）が更に一轉して出來たのであると信ずる。この活用形中の「る、れ」は前に述べた如く「有る」の漆着的變化であるから、今更論ずる迄もないが、將然段の「こ」は如何にして出來たかといふに、これは「き」が母音變化で「こ」となつたに過ぎないのである。我國語でもこの例は多い事で、「木の葉（キ）、「黃金（ガネ）」を「このは」、「こがね」などゝいふのと同樣なものである。加之この加行變格は、古くは「使（ケ）の來れば」、「ける人や」、「たれ」などゝ四段に用ゐた例さへ有るから、他の活用から成立つたものであることが明かである。

要するに以上、下二段活、加行變格を說明したやうに、我動詞各種の活用は皆四段活から變轉し、分出し、若くば他の活用の混淆形から出來たのである。これは只本論に關して必要な箇所丈について、しかも其要領丈を述べたのである。「一般動詞論」については、後日發表の折御一覽を願ふ。

又氏は

「助動詞の變化及形容詞の變化も論者の說の如く決して漆着的では無い、形容詞の如き一見漆着變化するものゝ如く見ゆれども、其二類の六變化を互に比較すれば、一定の語尾により規則的變化するものて無いことは誰も承知して居る事實では有りませんか、論者はこれ等も皆他より分出し混淆したものと言はるゝか、然らば一體何の動詞、何の品詞が其樣なものを分出して混淆しましたか。」

と述べられたが、自分はこれについて詳しくいひたいが、云へば中々長くなるから極簡明に答へよう。

一躰我助動詞は其活用形の上から見ても知れる如くに、動詞と同じ活用をなすもの、形容詞と同じ活用をなすもの、また一種異樣の活用をなすもの、三種類がある。其上この活用形も動詞、形容詞などの具備して居る變化を悉く有つて居らずに、或活用形に缺けて居る處がある。自分は助動詞の中で動詞と同形の活用をするものは、動詞から出來たもので、其破壞、若くは古形の殘存したものと思ふので、活用形の缺けて居る點などは其一證となるのである。殊に助動詞に良行の音の添はつて居るものは皆「有る」の漆着變化である。この事は普通の日本文典を一讀して助動詞各

條の說明を見れば、直ちに明かる事で、今更一々爰にいう迄もないのである。この良行音の添加しないもので動詞と同樣の活用をして居るものは、動詞の破壞物か若しくば其古形の殘存物である。又形容詞と同じ活用をして居るものは同理で、形容詞から出たものである。以上兩者の何れにもつかぬ一種異樣の活用をして居るものは、他の品詞からの變形物である。次に形容詞についてゞあるが、これは固より漆着的變化であつて、決して曲折的のものではない。已に我動詞、形容詞は一元であるといふ學說が從來から有る位で、其形容詞の活用の樣が我五十音圖に照して見ると加、左兩行に涉つて居るから、音雜活と稱せられて居る。形容詞は其活用が混淆形であることはこれでも明かるので、又「けれ」の活用形などは全く「有る」の漆着的變化であるのは、前に屢述べたのでも知れるであらう。以上簡單に極要點丈をいつておく。次にいわねばならぬのは、單語の比較に關してゞある。氏の單語比較は實に根本的誤謬であるといはねばならぬ。自分が過般の講演で聽いた丈では僅少稀有であつたが、氏は尙澤山にあるといはれて居る。縱ひ幾千百の例があるにしても、其比較の方法が根本的に誤つて居るから、自分には承知が出來ないのである。此の此較は日本語と印歐語とに於て、少しにても音韻、又は意義の上に似寄つた點があれば直ちにこれを捉へ來つて同系物なりと斷じ、其單語についての解釋なども單に印歐語の上にのみ說き去つて、日本語の上についての變遷及び解釋などは等閑に附せられた傾が多い。加之其兩者の比較に於て年代の考を全く無視して居られるのである。例へば日本語の「スメラギ」といふ上古の用語を以て、今日の印歐語の Sovereign に引つけるが如きは如何にや。一々詳論する迄もなからうと思ふ。よしんば上古の日本語と今日の印歐語と比較するにしても、一方日本語の變遷を論じ、又他方印歐語の變遷を論じ、彼此相對照して後斷定せられるならば承知もせうが、何をいつても只一方丈の論定を以てせられるのであるから片手落の仕方といはなければならぬ。要するに兩者の變遷をたどり年代の考を念頭に置かれたいものである。

又氏は比較について

「世の多くの言語學者は之をウーラルオルテイクに求めて居らるるが、私は之を印歐に求めて居る、」

といはれて居るが、抑これが氏の根本的の欽陷誤謬であるといはねばならぬ。何故ならば、凡そ言語の上に止まらず何事にても苟くも比較をする場合には、多少の緣故の存するものについてせねばならぬのである。然るに氏は從來世上の諸學者と其研究の方針を異にして、日本語の比較を印歐語にとられしとは、何の緣故あるによるか。この兩者の間に言語上の特質相似の點あるか。自分は不幸にもこれらの點は毫も見出さぬのである。日本語と印歐語とは全く言語上の性質を異にして居る

ものと斷言する。自分は矢張從來世の學者達が其言語の特質に相似の點多きウラルアルタイ語族のものに比較した例に從うべきものと信ずるのである。

氏は自分が年代の考を無視した論であるといつたのを誤解して、約四頁に渉る非常に長い各國語の研究史を述べられたが、これは別に爰に反駁する價値もないから言はずにおく。自分が年代の考を無視したものといつたのは、比較上兩國語の變遷及び其同時代對照の意である。研究史の意味ではない。一言丈爰にいつておくのである。

最後に氏は

「論者は日本語をウーラル、オルテイクとせらるゝや否や明言して居られぬが、評論の全體より考ふるにウーラル、オルテイク說を執らるゝ者と見ればならぬ、果して然らば之を證明するに足る歷史的考證、年代考證有りと云はるゝか、」

と述べられたが、自分は之に答へて然り、日本語はウラルアルタイ語に屬す、と斷言する。日本語は印歐語とは全く言語の性質形態を異にし、毫も相似の點なし、故に日本語は印歐語にあらず、となすものである。今手近にある保科助教授の「言語學大意」に載せてある、ウラルアルタイ語の特質を擧げると、

イ、加添語（漆着語と同意なり）なること。

ロ、子音組織に於て、清音が最初に發達して、濁音が後に發達したること。

ハ、文法上の形式は、屈折を以て示すことなく、概ね語尾にて示す例なること。

ニ、關係代名詞の存在せざること。（同書一九〇—一九一頁）

とあるが、これらの特質に對して、日本語は何の點まであてはまつて居るか。又古くは記、紀、萬葉、祝詞、宣命、の類から近くは今日の小說、雜誌、新聞に至るまでの文章を採つて考へて見たならば、直ちに氷解するであらう。一々詳細に論述する迄もなからう。印歐語の特質如何は別段爰に揭げるまでもなく、平井氏は能く御存知であらうが、その印歐語の特質を採つて、我日本語に對照して考へられたならば、どうであらうか。

元來言語の比較論には其比較する兩國語に精通せねばならぬ。縱ひ精通までは行かずとも普通の知識は有つて居らねばならぬ。今平井氏の論を讀んで、氏は其專門であるから、印歐語には造詣深く精通せられて居ることは知れるが、我國語の知識はそれに比べると、餘程劣つて居りはせぬかと思はれる。それで今後尙一層國語の

研究を積まれて、其の後に立論せられんことを願ふのである。

數年前、故田口博士が人種論を唱へられ、それから議論が生じ、先輩藤岡、新村兩氏の之に對する駁論があつたが、今日、自分が平井氏の言語論に對して反對說を有するのは、丁度それと同一轍であると考へる。平井氏の「日本語はアリアン語なり」といふ論について想ひ出すのは、Aston 氏が一千八百七十九年(明治七年)日本亞細亞協會報告第二卷に於て、Has Japanese an affinity with Aryan languages? といふ論文を掲げて、平井氏と同じ說を唱へられたことである。これは最早二十四年も以前に屬する事であるが、今日から見ても其說明の方法などは中々巧妙に出來て居る。平井氏も無論この說は一讀せられたであらうが、氏の研究も二十有餘年來の結果であるといふから、丁度 Aston 氏の唱へられた頃から始められたと思はれる。對照になるのてフト心に浮んだから一寸序にいつておく。又後になつて一千八百九十一年(明治二十四年)に、同じ日本亞細亞協會報告第十九卷に、Percival Lowell 氏の A comparison of the Japanese and Burmese languages といふものさへ出たのである。近時米國では排日事件が起つて居るから、「日本語はアリアン語なり」といふ樣な論を彼等に聞かせてやつたなら宜しからう。對外策として、又は外交上からいへば、これも大層都合がよい事であらうが、吾々學界に在る者から見れば、學理上、遺憾ながら全然反對說を採らねばならぬのである。

輓近、國語學が發達して、益隆盛の域に進みつゝあるのは、實に我學術界の爲めに慶ぶべき次第である。それで我國語學者に一般言語學の知識を普及するのは、固より必要な事であるが、同時に、日本に於ける泰西語學者の爲めに、國語學の知識を鼓吹することが更に焦眉の急であらうと思ふ。何事も西洋に心醉して、自國の特長までも忘却する樣になつては困まるのである。

陳べたい事は澤山あるが、自分の答論の爲めに、貴重なる本誌の紙面を餘り多く費すのは、讀者に對して氣の毒であるから、成丈省略して要領丈をいつて置いた。終に望んで、平井氏が自分の所感の一文に、熱心なる駁論を與へられ、これに對して自分がまた異見を呈する榮を得たのを、深く喜ぶのである。（明治四十年七月二十日夜稿）